平和運動としての家庭連合氏族共同体運動の可能性の議論 [1)]

A study on the Possibility of FFWPU Tribal Community
as a New Way of Peace Movement

윤 도영（ユン　ドヨン）[2)]

Ⅰ．　導入
Ⅱ．　神氏族メシア摂理と氏族共同体の到来
Ⅲ．　氏族共同体のアイデンティティと形成過程
Ⅳ．　平和運動としての示唆点

Ⅰ．　導入

中東とヨーロッパ、そして韓半島で展開されている紛争の現実は、まだ人類に恒久的な平和が到来していないことを知らせてくれる証拠である。平和に対する信頼が壊れている今の人類は、平和の展望をどこから探すのだろうか？戦争のない状態を平和と規定する狭義の平和概念までも 21 世紀前半部を迎える人類には手に余ったように見える。私たちはどのような平和に対する認識に到達しているのだろうか？私たちが抱えている平和概念は何であり、その達成法案は何であろうか？現代の私たちに、本当の平和の道に到達することができるように合意され、共有することのできる平和の概念は果たして存在するのだろうか？人類が一定の合意と理解に到達する時まで平和概念に対する本質的な問いを持続的に行わないとすれば、私たちはまた葛藤の状態から抜け出せない間違いを犯すことになるであろう。平和ではないものを平和として認識するようになる間違い、平和への進歩に対する意志の放棄、または絶望状態の蔓延した状態に、本当に人類歴史がかけあがるようになるかもしれない。ゆえに、人類が必ず成し遂げなければならない平和の状態(state of peace)に対する概念研究は重要になる。

世界平和統一家庭連合（以下、家庭連合）は、その名称からも確認できるように、世界平和(world peace)という単語を冷戦時代から活用して、その教えの指向点にしてきた。本団体の宗教的運動の指向点に、人類が享受しなければならない平和の世界をおいているのである [3)]。したがって本団体で設立した多くの団体に世界平和という名称を含めており、全ての文献から世界平和という単語を探す事は難しい事ではない。

それでは、この団体は平和の方法論をどのように設定しているのだろうか？家庭連合は世界平和に到達する方法論に対して、その名称から分かるように、理想家庭を中心とした世界を構築することを主張している。家庭の解体と分裂が、現在の人類社会が直面した全ての世界的問題、そして人類社会の葛藤と紛争の根本原因だと分析している。したがって、家庭を回復して健康に導き、特別に創造主である神様を中心とした人類大家族社会を建設する事が平和に至る方法であるということを主張しながら、綿々と実行してきている。

一方、2014 年４月、真のお母様韓鶴子女史のビジョンによって、家庭連合が全世界の祝福家庭における神氏族メシア摂理の本格的な出帆を迎えるようになった。神氏族メシアの理想は、聖和された文鮮明先生の最後の遺言であるという点から、家庭連合の祝福家庭に、必ず成し遂げなければならない宿命として認識させている。しかし、神氏族メシア摂理を通した天一国共同体の究極的な指向点に対して多くの疑問があるにはあるが、神氏族メシア摂理が対外的に進み、平和運動の側面でどのような意味があるのか、詳しく見ることも重要な理論的作業となると見ている。

Ⅱ. 神氏族メシア摂理と氏族共同体の到来

2.1 神氏族メシア摂理の研究価値と議論の方法

神氏族メシア摂理は多くの観点と代案を考えてみる事ができる魅力的な研究主題である。その中で本小項では氏族共同体に対する議論を提起しようとする。世界平和統一家庭連合の世界本部は、2015 年 2 月 18 日、真の父母様の承認により“神氏族メシア使命完遂世界基準”（以下、世界基準）を発表し、本研究者は“世界基準”発表の背景と規定内容に対して論じた[4)]。これにより、神氏族メシアに対する議論は、先決しなければならない重要な研究対象が氏族共同体であるという点を強調した。理由は次の通りである。

まず、家庭連合の祝福家庭が神氏族メシアの使命者として伝道活動に臨むようになれば、因縁を結んだ霊の子女たちが数的に増えるようになる。また、神氏族メシアが直接霊の子女を管理して信仰指導をするようになれば、必然的に神氏族メシアを中心とした人的ネットワーク、および共同体(community)が形成されるようになる。したがって、この共同体の特性と指向点に対する議論が必要である。二番目に、神氏族メシア摂理には‘氏族’という固い単語を含んでいる。宗教で氏族は一般的な概念ではない。氏族を強調することは儒教文化圏でも可能である。この氏族概念を本研究では一つの実体的な概念として認識しなければならず、さらに一つの社会単位(social unit)として受け取る必要があるという点を主張しようとする。したがって、氏族の概念化に対する具体的な議論が必要である。家庭連合が主張するように、祝福結婚を通して血統転換がなされた祝福家庭のアイデンティティ、そして新しく変化する食口共同体のアイデンティティに対する根本的な考察なしには、この摂理的な課業を明確に認識する事が出来ないものとみる。三番目に、家庭連合の祝福家庭（天一国国民）の基本的な信仰と生き方に対する再考察が必要である。教会体制と食口共同体の均衡、そして食口共同体の進歩した形態に対する議論、および食口共同体と教会体制の接点から提起される主要論点を扱う必要があるとみる。さらに、宗教文化的な観点から、構成員の基本的な生き方と文化に対する議論へ広げることが必要であるという事ができる。

このような課題は天一国全体の国民の未来がかかっている重大課題として多くの学者、諸賢の参与を通して、透明で体系的に成立していかなければならないものとみる。

本小項では最近、家庭連合が政策的に重要な課題として力量を集中している神氏族メシア運動の平和論的観点からの意味を探索しようとする。

2.2 家庭連合氏族共同体の意味

家庭連合の理念に照らしてみると、社会的な基本単位は祝福家庭である。家庭連合が最近頒布した教会法人“天一国憲法”によれば、祝福家庭は真の父母様による祝福結婚を通して原罪を清算して重生された夫婦と、その直系の後孫を言う 5)。血統転換を通してサタンの原罪を清算し、重生した夫婦となり、真の父母様をメシア、救世主、真の父母として侍り、新しい出発をする天一国の国民であり、世界平和統一家庭連合の祝福家庭を指すものである。文鮮明、韓鶴子総裁が人類の真の父母として顕現されたために、全人類は真の父母から重生され真の父母の子女とならなければならない。したがって、真の父母の相対的概念として人類全体は真の父母の子女となるのである。祝福家庭の数の増加は単純な数的な拡大を通した天一国の民の増加の意味以外に、異なる意味を持つ。祝福家庭の拡大はすなわち社会的な影響力の拡大を意味するのである。家庭は家族構成員が親密な関係を通して相互的に連結された社会共同体(interconnected social unit)である。特に、神氏族メシア摂理は家庭連合の祝福家庭が、この神氏族メシアの資格で伝道活動と祝福活動を通して霊の子女圏を編成して、重生された子女の信仰教育を主導するため、自然に神氏族メシア家庭を中心として社会的ネットワークの強度は増加し、

これを通した社会的な影響力も増加する。ここに神氏族メシア摂理に対する高い期待がある。

2.3 家族共同体の指向点

祝福家庭は祝福を受けた家庭、および一つの家庭単位である。一般的に家族は父母、子女、夫婦などの関係で結ばれ、一つの家で一緒に生活する共同体を言うのである。家族は人類の発生とほとんど時を同じくして発生した一番古い集団であり、どの社会・時代にも存在する一番基本的な単位である。したがって、家族は一社会の基本単位であり、一番重要な資源である[6)]。

祝福家庭の社会的アイデンティティを議論するために、一般的に受け入れられる家庭概念をまず調べてみることにする。キク・ドゥソップと同僚（2006）たちは、家族は個人の生と行為の準拠地であり、社会が持続するための基本単位であると言った[7)]。家族の概念は様々な学者たちによって違う形で定義されるので、一つに断定するのは容易ではないが、家族に対する伝統的な定義はアメリカの人類学者、マードック(J.P.Murdock)の主張に根拠をおく。彼は、家族は夫婦と彼らの子女で構成され、住居と経済的な協力を一緒にしながら、子女の出産を特徴とする集団であると定義した。同様にマードックの家族定義は、共同の居住と経済的な協力、社会的に公認された性関係、子女の出産などを強調した。一般的に受け取られる家族概念と家庭連合の観点で受け取られる家族の概念において、外形的に一致するということが分かる。マードックの家族観点は夫婦と子女を家族の核として把握していて、核家族的な定義と呼ばれる[8)]。

反面、レヴィ＝ストロース（Levi-Strauss）は、家族は結婚から始まり、夫婦と彼らの間に生まれた子女で構成されるが、この他にも近い親戚が含まれ、家族構成員は法的な絆と、経済的・宗教的な権利と義務、性的権利とタブー、愛情、尊敬などの多様な心理的絆で結合されていると言った[9)]。レヴィ＝ストロースは家族の範囲をマードックの定義を説明し、内容的に説明しながら家族構成員の絆、関係、結合の運命共同体的な性格を強調した。したがって、レヴィ＝ストロースの家族定義は拡大家族制度を取っていた国家に社会の家族概念を定義するのに、より相応しく受け入れられたので、これは神氏族メシア摂理を指向する家庭連合においても受け入れられる類似性がある。

一般的には家族の分類は、マードックが分類した拡大家族(extended family)と核家族(nuclear family)の分類方法が一番多く使用されている[10)]。マードックは1949年に著した社会構造(social structure)において、当時現存した250個の文化の家族を調査して、核家族と拡大家族、複婚家族に分類した[11)]。一般的に核家族は結婚した夫婦と未婚子女で構成された２世代家族形態を意味し、拡大家族は祖父母と彼らの結婚した子女夫婦および孫が一家庭で同居しながら共同の生活を営む直系３世代の家族形態またはそれ以上を拡大家族と言う。拡大家族は３世代以上の家族構成員が共同生活（同じ場所)、または近距離での生活をしながら頻繁な相互関係を結ぶ特性がある。

マードックの拡大家族に対する議論は、またレヴィ＝ストロースの多様な絆の関係の結合体としての家族に対する議論は、神氏族メシア摂理に示唆するところを次のいくつかのように要約できる。まず、マードックの３世代以上の家族の結合を意味する拡大家族は３代（祖父母、父母、子女）が一緒に住む家族形態を追求する家庭連合の家庭理想に非常に一致する概念であると言える。二番目に、レヴィ＝ストロースは家庭を共同の関心事を指向する運命共同体として見た。すなわち、共通の意識を追求する構成員の結合体として把握したのである。このような内容は家族構成員の共同居住や血縁的な関係を超えた内容として家族間の結合の単位性を説明するのに有用な接近であると言うことができる。整理すると、マードックが言う拡大家族は家庭連合が指向する祝福家庭の外形的な姿と似ているのである。またレヴィ＝ストロースが言う共同運命体としての家

族は神氏族メシアが指向しなければならない氏族共同体の断面を見せてくれたものだと言うことができる。

一方、神氏族メシア摂理は祝福家庭が神氏族メシアとして多くの人を救い、誘導し、祝福結婚に同参させることによって真の父母様の路程に従うひとつの小メシアとしての使命を果たす事を前提にしている。具体的な実践法案として、2015 年 2 月に真の父母様は、祝福家庭が神氏族メシアとして 430 家庭以上を祝福圏に同参させる事で氏族のメシアとなることを指示された。父母として沢山の子女を養育することは現実的に容易ではない。しかし、神氏族メシアは祝福に導いた対象者（霊の子女）に対してメシアの役割を果たさなければならない。言い換えれば、父母としての霊の子女に対する信仰教育の責任のことである。したがって、頻繁な交流を通して、本人の直系の子女のように教育の使命を果たさなければならないのである。これが、神氏族メシアがひとつの共同体および氏族共同体を形成するしかない理由となる。および円滑な信仰教育をするためには父母がある程度教育に介入しなければならない。したがって、救いのわざに同参した霊の父母と霊の子女の関係は特別なものとならざるを得ない。その心情的関係で形成されているのである。霊的な生命を吹き入れて救った人が霊の父母として、そして指導者として存在する氏族共同体において、凝集力(cohesion)は相対的に高いものとして期待できる。真の父母様は祝福家庭たちが氏族を成し、民族と国家を形成する根幹を築かなければならないと語られ、天一国の体制は家庭の連合(united families)ではなく、拡大された家庭の連合(united extended families)、言い換えれば、祝福氏族の連合(united blessed tribes)を根幹とした社会となるのが望ましいのである。

2.4 拡大家族の有用性

違う意味で拡大家族の単位性を詳しく見れば、現在社会問題が家族解体現象だけでなく、核家族化のトレンドにも大きな原因があると見ることが出来る。家族形態がだんだん小規模に断片化され、家族の形態だけを維持し、一番極端的な形態である“１人家族”にまで進行されたことは社会で家族の役割と機能がだんだん縮小されているということを見せてくれている。言い換えれば、現在の一般的な家族において、家族機能(function of family)の価値は減少し、家庭のアイデンティティが毀損され、家族構成員の結合の程度が安定的でない方向に進行している残念な状況に処している。

反面で、真の父母様は少なくとも３代が一緒に暮らす大家族の家族形態を提案された。現在、家族価値(family value)の単位性は、大体において広く受け入れられているアジェンダであるが、どのような形態の家族であるのか、どのような家族関係であるのか、という具体的な内容においては多様な観点が提示されている。３代が一緒に暮らす拡大された家族形態を指向する家庭連合の家族概念は拡大家族および大家族社会の長所を支持する立場にあると見ることができる。

拡大家族は核家族に比べて次の長所を持っている。

はじめに、家族構成員のネットワークが拡大される。家族構成員の増加は家族関係の数的増加を意味し、家族構成員の関係が高い情緒性をもっているので家族内で情緒性は強化される。二番目に、共通の関心事を通して共通の行動を取る事ができる。家族の親密性は、凝集力を強化し、適切なリーダーシップと価値共有、組織化を成す場合、行動の統一を図るのが容易である。三番目に、文化を形成する可能性が高くなる。高い関係を通して共有された価値は文化の一形式として持続され、時間が経過するにつれて伝統として残されるようになる。

一方、家族の価値と遺産が世代を超えて伝統として面々と残され相続されなければならないというアジェンダに至るようになれば、家庭が後孫のために持続可能でないといけないという結論に至るようになる。また、このような形態の組織的な継承は、家族の

境界を越え、親族(relative)、血族(clan)および氏族(tribe)の概念で構成化され、私たちはこの議論を避ける事が出来なくなる。世代を超え、時間の流れに従って、多数の家族がお互いに血縁と文化の枠でお互いに連結されるようになる(inter-family relations)。また世代を超え、血統と文化で因縁を結んだ構成員たちは、親密な絆の関係の中で、多様な下位文化(subculture)を形成するようになり、その下位文化は一つの伝統体系の枠から共有可能となり、多次元的な情緒性(multi-dimensional emotion)は強化される 12)。すなわち、拡大された家庭を維持し、世代を超えた家庭――言い換えれば、氏族――に至れば、豊かで、拡大された心情的な関係の中で、多様な文化的内容を共同体の中で共有する事が出来るようになる。

2.5 宗教基盤、氏族共同体の社会的影響力

また違う観点から見れば、拡大された家庭は相対的に社会へより大きな影響力(social impact)の潜在性がある点で有用である。普通の個人や家庭が社会に与える影響は制限的であり[13]、企業や学校、非営利団体などに比べて影響力は小さい。しかし、拡大された家族が凝集力を発揮することができる条件が形成され、組織の意思決定を通して社会的影響を意図的に発揮することを氏族の構成員たちが共有し、またそうすることができる氏族の求心点（指導層）や、組織化の程度が十分であれば、その組織体の社会影響力の潜在性は限りないと見ることが出来る。高い影響力を期待する理由の一つは、人と社会に対する影響力の質の違いは社会的ムーブメントの呼びかけではなく、深い絆の関係の中から出てくるからである。社会の中の個人は自身と絆の関係がない形式集団の呼びかけよりも、近い個人や属している集団の勧誘をよりもっと信頼する。また、そのような深い絆の関係は長い時間、人間相互間の持続された関係を通して築かれ拒否するのは容易ではない。このような点で、第１次集団である家庭や氏族共同体の社会的圧力は非常に大きいものである。

拡大家族としての氏族共同体が凝集力を発揮するのに良い条件は、宗教的価値を共有した場合である。組織価値の中で構成員に一番強い行動の規範（制約条件）となるものが宗教的価値である。万が一、家族や氏族が宗教的な教えを共有すれば、共通の行動水準は高くなる。言い換えれば、家族や氏族の形態で時間の経過に従い形成された一定の数の共同体が宗教の価値観を共同体のモットーにした場合の行動動力は、非常に高い水準へ強化されるのである。

Ⅲ. 氏族共同体のアイデンティティと形成過程

社会の中の持続した関係(consistent relationship)は人々が大部分、長い期間をかけ、お互いに築こうと暮らしながら形成された[14]。文鮮明総裁もこのような因縁と伝統相続に対する御言を沢山下さり、先祖の根(ancestor as root)にならないといけないという御言も下さった。私たちは草の根組織として一地域社会で土着化された祝福家庭を中心とした関係の範囲がどのようなものであるのかという事に対する省察が必要である。祝福家庭が神氏族メシアとして天宙的に天の父母様に侍り、一人の小メシアであり、氏族メシアとして、各自の任地で愛と心情を中心として地域社会を先導する姿はいったいどのような姿であるのだろうか？そして神氏族メシアの使命を果たす祝福家庭を中心として拡大された家族形態としての氏族は、地域社会でどのような形態と機能を担当するのであろうか？神様を中心とした新しい因縁の背景と新しいネットワークを中心として、新しい文化コードを定着することが氏族共同体の価値となる。このような深みのある因縁と拡張された宗教共同体の範囲の中で、新しい所属感と心理的な安定を獲得し維持する事が出来ることに対する期待感、これがまさに神氏族メシア運動を見る期待感である。

3.1 氏族共同体の範囲

祝福家庭はまず純潔であり、愛と心情が溢れる温かい家庭を築かなければならず、また拡張された家庭の形態である氏族を成さなければならない。一般的に家庭は父母と子女で構成されるが、子女は血縁的に直系の子女を生み、または養子養女を入籍することで構成する事が出来る。また、子女達が代を継ぎ、孫息子、孫娘を持つようになることで、自然に家庭圏は漸次的に継代を引き継いでいく氏族圏へ拡大されていく[15)]。

氏族形成の二つのキーワードは人（血縁）と場所（故郷）である。氏族共同体の形成は血縁的因縁をもった自身だけの氏族を編成する課業と氏族が根を下ろしていく場所である故郷としての環境創造行為（つまり環境土着行為）および、地域復帰など二種類の課業として区分される。

本研究者は文鮮明先生の御言を分析しながら、先生が使われた用語、‘根’という単語は“人に対する因縁の根”と“場所に対する因縁の根”と区分されることを発見した。因縁の根は結局“血統(lineage)を言うものであり、場所の根は“故郷(hometown)”として見る事が出来る。ところで、真の父母様の御言の中には氏族と故郷の意味は分離されていない。家庭が根を下ろし、維持拡大されるには、因縁の根を共有する人たちが必要であり、そのような人々と長い間一緒に生きていく場所、つまり環境の根である故郷が必要である[16)]。

しかし、人類は神様、真の父母様を中心とした本然の血統を持つ事が出来ず、したがって祝福家庭はまず仕方なく肉親の父母から離れなければならなかったということが摂理的な現実であった。本然の故郷を探す事が出来なかったが故に、肉親の故郷に背いて、まるで失郷民のように生きなければならない人生である。したがって、何も分からずにいる外地人に御言を伝えなければならなかった路傍伝道と失郷民の人生は、私たち家庭連合の祝福家庭には見慣れた場面となったのである。二種類のキーワードを中心として二種類の課業が導き出される。

最初の課題は血縁的な氏族編成を通した家庭圏の拡大の課業である。氏族編成は結局神様の子女圏の拡大を意味する。氏族メシアは氏族の真の父母の役割を遂行する。父母には子女が必要なため、直系の子女を授かり、または養子養女達の入籍（霊の子女圏の形成）を通して２代圏からの氏族編成が可能である。さらに、３数完成の原理的な数理方式によって、家庭が３代で完成するように、２代圏の子女達と同一に直系の子女と霊の子女を生みながら３代の編成によって氏族の基本構造が完成されるのである[17)]。３代を完成し、１次的に氏族圏を成すようになれば、継続的に代を引き継いで、氏族圏が拡大されながら支派を形成するようになるが、この支派を通して血統的な因縁が伝授されるようになる。結局神様と真の父母様の血統の強固な土台が氏族圏の保護の中で可能となるのである。このような意味から家庭の垣根を越えて、氏族と支派という組織体を通して重生された天の血統は継承されると見ることができる。

二番目の課題は、場所的な意味を持った任地、および故郷を設定する事である。家族構成員がつき合いながら生活するように、氏族構成員も近くに集まり、一緒に生活しながら村落を成すようになる[18)]。このように氏族の始原者が開拓し、定着した地域は氏族の故郷となる。この後、氏族構成員が長い期間一緒に生活しながら氏族の文化を築き上げるようになれば、その集成村がまさに氏族の心の故郷、心情の故郷として残るようになり、氏族の中心地となり、聖地となる。韓国の固有伝統には、地方ごとに門中や宗中が位置する場所を中心として、多くの伝統的要素、伝説などのストーリーが残っているが、それは望ましい一つの例だと言うことが出来る。特定地域を故郷として定着した氏族共同体によって、より強固な文化的下部構造を持つと言えるのである。

一方、氏族の指導者は、特定の地域で血縁的な因縁の代表者であると同時に地域社会

の指導者となる。地域社会で氏族に編入された子女圏（祝福家庭）はアベル型子女であり、すでにその地域に根を下ろして生活してきた近隣の人たちはカイン型の子女として、氏族メシアは地域社会（故郷）で二つの子女圏を包容しなければならない。言い換えれば、血統にも直系の子女と霊の子女がいるように、故郷にもアベル型住民（イスラエル）とカイン型住民（カナン７族）がいると見ることが出来る[19]。父母型リーダーシップは、天一国の民には宿命のようなリーダーシップの形態である。神氏族メシアは地域社会の父母として二つの子女圏を同時に包容することができなければならない。

3.2 氏族共同体の機能

氏族メシアが導く氏族共同体は次のいくつかの機能と関連がある。

まず、氏族共同体は神様と真の父母様を中心とした祝福家庭の形成と養育、維持および保護、そして管理の機能を遂行する事ができる。祝福家庭の家族共同体は制限された資源を保有するため、組織的な活動をするのに制約がある。したがって、成長過程においては、教会という天一国の一連の行政的な機能を成す組織体が祝福家庭を保護し、支援しなければならない。しかし一定の水準の組織化を成した氏族共同体はその規模（所属している氏族員）によって資源の幅が広いので、自らが所属する構成員の各祝福家庭を一時的に養育し、保護する機能を遂行する事が出来るようになる。

二番目に、天一国の伝統相続の機能である。祝福家庭の伝統は氏族圏の保護の中で伝承され受け継がれ、氏族という体制を通してはじめて社会伝統としての転換が可能になる。制限された数の家庭は血統を受け継ぎ、縦的な伝統相続への意味はあるが、社会伝統としての横的拡大には限界を持つ。

三番目に、氏族は伝統と家法、そして氏族全体の集団的行動を通して、地域社会の先導の機能を果たさなければならない[20]。模範的な家族伝統は所属する社会に自然に肯定的で、積極的な影響力を行使するようになる。

3.3 氏族共同体の形成のための課題

氏族共同体の形成のために重要な最初の課題は、各祝福家庭の神氏族メシアに対する歴史的課業の認識にある。まず御言を通して、氏族共同体に向かう真の父母様のビジョンが絶対的であるということを注意喚起する必要がある。さらに、天一国が氏族単位の共同体を建設することに対する当為性、可能性に対する歴史的な使命意識が、まずなければならないのである。何よりも重要なことは、氏族共同体が一つの責任ではない祝福家庭の未来であり、祝福になるという点である。氏族共同体が持つ無限の可能性を考慮する時、現在の家庭単位に満足する必要はないということとして見る。

二番目は、食口共同体の体質改善にある。今まで食口たちは祝福家庭の受けた順序に従って所属集団を区分し、または所属している教会に従って所属集団が分類された。しかし、これからは祝福家庭が自ら氏族メシアとなり、自身の氏族を形成することによって、天一国の下位システムは地域教会を支持する氏族の集合体として進んでいかなければならない。天一国内で社会基本単位が氏族共同体となることは、食口社会の底辺に多くの根本的変化があるという事を意味する。同時に、氏族共同体としての宗教共同体は他宗教と確実に区分される特徴でもある。食口共同体、氏族の集合体が変化していく時、家庭連合の宗教的特性も明確化するものと期待する。

三番目は、教会（宗教）文化の体質改善と氏族管理体制の出帆にある。拡大された家庭に対する議論と合わせて、大家族中心の文化をキャンペーンの道具として積極的に運動をしなければならない。このために家庭連合の各教会単位において氏族を管理し、氏族共同体との均衡のための法案が必要である。

3.4 氏族共同体の躍動性：順次的な共同体形成の議論

(1) 氏族共同体の形成：直系の子女と霊の子女

氏族共同体の形成のためのいくつかの順次的過程を次のように考慮する事ができる。

最初の過程は氏族指導者である父母として宣布式を行うことである。真の父母様はすでに 1992 年の指示において、祝福家庭が“氏族メシア宣布式”をすることを明示された。

二番目の過程は、氏族の父母として子女を編成する活動である。氏族メシアが氏族の父母として氏族共同体の子女圏を形成する方法は、出産を通して直系の子女を生み、氏族の一員として編成する方法と伝道活動を通して新しい信者を祝福家庭として転換させ、自身の霊の子女[21]として編成する方法の二種類の方法がある。神氏族メシアは結局二種類の子女圏を一定の数以上で形成する課題があるのである[22]。自身の直系の子女の場合、伝統を相続し、信仰教育をして、祝福に同参するよう養育しなければならない。霊の子女の場合、血統転換儀式である祝福式を通して、真の父母様から原罪を清算し、血統を転換して、天の父母様と真の父母様の子女として重生の過程を経たのち、天一国に入籍するよう導かなければならず、同時に、氏族メシアを霊の父母として尊重し、その氏族メシアが導く氏族共同体の一員として活動するようになるのである。

三番目の過程は、子女達を天一国の国民として参与するようにする手続きを言う。具体的に言えば、入教願書を提出する家庭に統一旗を掲げ、真の父母様のお写真に侍る手続きと同時に、天一国の国民として守らなければならない五つの義務を守る行為を言う。

四番目の過程は、神氏族メシアが氏族構成員に対する牧会活動をして、氏族構成員と共に与えられた任地での活動を通して地域社会を先導して、国家復帰のための地域的活動の責任を果たす事を言う。このような一連の過程を通して、祝福家庭は神氏族メシアとしての使命的な責任を果たす事ができる。

(2) ３段階の理想の継代を通した氏族共同体の維持

二番目に、世代(generation)を通した氏族共同体の構造に対する関心が重要である。世代は氏族共同体の核心要素である。家族の世代が増加すれば、親族圏が形成される。本論文ではこのような親族圏の形成を氏族と言った。

家庭は３代圏を成就した時、はじめて安定的な構造を成すようになる。祖父母-父母-子女から成り立つ３代体制は核家族である２代圏よりも安定的である。家族構成員は３代圏の中で、お互いに補完作業を通して自体的に永続するようになり、教育、管理、発展的な分化が加速化される。言い換えれば、家族集団が３代圏を成せば安定的に維持されることを期待でき、氏族集団も継代の３代圏の形態を持てば永続を期待することができるようになる。

家庭の拡大型である氏族も祖父母圏、父母圏、子女圏の氏族体制も継代的(generational)に見ると、蘇生の１代、長成の２代、そして完成の３代権の基台を越えてこそ、安定的に機能するようになる。神氏族メシア家庭１代では一定の数以上を管理する事が出来ないからである[23]。真の父母様の御言によれば、存在する全ての被造物は３段階の構造で構成されている。３段階とは上位、中間、下位(upper-middle-lower)の三つの水準の構造を言う。真の父母様はこのような三つの水準の構造は自然万物から容易に探す事が出来ると説明される。さらに、全ての社会組織もこのように三段階で構想されたものが願われた構造であると説明される。

手を見てみれば、やはり３段階からなっています。これは一つ、二つ、三つ、３段階に上がっていくのです。体全体を見れば、頭、胴体、手足の３段階で構成されています。子供達は手をこのように握ります。親指は何を象徴するのでしょうか？神様を象徴する

のです。神様は男性と女性の二つの性稟を持っているということです。この四つの指は春夏秋冬を象徴し、十二の月を象徴します。したがって宇宙に神様が潜んでいることを象徴しているのです。宇宙も液体と固体と気体から形成されています。色も三原色から成り立っています。社会組織も３段階で成り立っています。私たちの体の内蔵の重要な器官も肺臓、胃腸、心臓など三種類がお互いに授け受けしなければならないのです。このような問題が自然に生じるのではなく、ある母体から反応的な結果として生まれたものであるということを私たちが象徴的な現象を通して知る事が出来るのです[24]。

今まで私たちの組織の話をしました。統一教会の組織は管理組織ではなく、行動組織です。私たちの組織は世の中の組織とは違います。原理的な組織であるので、神様を中心として全ての組織が関係しています。中心となられる神様に地上が連結されるためには、人類始祖がいなければならず、子女がいなければなりません。３段階です。私たちの原理を中心として四位基台の復帰であるのです。神様を中心として二性性相に分立されたものが一つになり、子女を中心として糾合される３段階です。この３段階が一つのシステムです。これはどんな人でも取りさる事はできません。取りさったらいけません。これが原則です。これは私たちの原理で見てみると、四位基台という内容です[25]。

全ての事を、国家を中心として... 統から、班から、皆帰って始めれば、組織制としては統と班だけ統一されれば、全部終わるのです。これは蘇生・長成・完成の３段階を意味します。自分自身を中心として垂直には家庭と統・班、横的には自身とお父さん、おじいさん、このように自分自身を中心として蘇生・長成・完成の３段階基準を中心として家庭の転換期に入っていくのです。その時、何を中心としてそのようになるのでしょうか？真の父母の愛と共に頭翼思想、神主義を中心として帰っていくことで、サタンは歴史を通してどんな讒訴条件も持ち出す事は出来ません[26]。

３段階構造がもつ長所は次の通りである。まず、組織からの各水準別管轄が３段階に運用されているので、遥かに安定的な組織構造を維持する事ができる。二番目に、組織が水準別に連結され、持続的発展を企てることができる。したがって、真の父母様は、このような３段階構造は家族構造においても基本構造となるとおっしゃられた。

“真の祖父母、真の父母、真の子女を中心として３代が一つの家庭で永存される神様に侍って暮らす天一国家庭を探し立てることが氏族メシアたちの責任であり、平和大使と分捧王たちの使命であり、神様の願いであることを確実に知らなければならない。万が一、全世界がこのような真の家庭だけで満たされるとするならば、そこには弁護士も、検事も、また更には判事も必要のない天道と天法が治める順理の世の中となるだろう。（平和経 p. 1587, 2007. 8. 7）

（３）氏族共同体文化の定着

氏族メシアは氏族構成員を指導して、氏族内で、天の父母様と真の父母様から与えられた固有の教会伝統を氏族の文化として維持・継承しなければならない。このような側面から氏族メシアの使命とは、真の父母様を代身とした小メシアとして、真の父母様のみ言を訓読、教育、実践、伝播する文化的現象を、構成員の日常生活の場面場面に定着させる祝福家庭となることを言うのである。その文化伝統の継承は次の三つの課題で実現する事ができる。

このような御言を中心とした信仰生活が、氏族の模範家庭として、氏族メシア家庭が信仰的にまず模範とならなければならない課題がある。全ての氏族共同体の所属する家

庭が氏族メシア家庭の模範的生活を通して、リーダーシップを受け入れるからである。それは結局、氏族メシアが直系の子女の養育を通して氏族固有の文化が最初の出発をするようになる。直系の子女は祝福 2 世として、血統転換の後原罪なく生まれた世代を言う。直系の子女も伝統相続と信仰教育が成されなければならず、直系の子女をよく教育させる事は氏族メシアの重要な課業であるということができる。“天一国憲法第 21 条 4 項”には天一国の国民は真の父母様の御言を訓読、教育、実践、伝播しなければならないと規定されているため、直系の子女に対する正しい教育は氏族共同体の共通の責任であると見る事が出来る。

二番目に、氏族共同体の文化形成の鍵は、結局霊の子女の編成と教育にある 27)。メシアの使命はサタンの血統を断絶し、天の血統を伝授することにある。直系の子女を生み育てることは祝福家庭の使命である。神氏族メシアは祝福家庭の直系の子女の教育にだけ留まってはいけないのである。自身の直系の血統でないとしても、堕落した人類が存在する限り天の摂理は集結されないため、祝福家庭は真の父母に接ぎ木され重生される課業に必ず同参しなければならない。神氏族メシア摂理とは、祝福家庭が堕落した人類を復帰して、重生された子女に転換する真の父母様の摂理路程により積極的に同参するようにする意味で、メシアの使命者となるのであると説明する事ができる。このように人類を重生させることはつまり祝福式であり、したがって一つ一つの祝福の手続きが全て重要である。堕落した人類は、祝福書類、祝福教育、聖酒式、蕩減棒行事、祝祷、40 日聖別生活、3 日行事などを教会が規定した手続きを正しく教育して適用しなければならない。

三番目に、また他の重要な事案として霊の子女と直系の子女の関係に注目しなければならない。神氏族メシアが父母であるならば、直系の子女と霊の子女は二つの子女集団となる。したがって、直系の子女と霊の子女の和合と共存が重要である。復帰の過程で必然的に頭を抱えるアベル型の子女とカイン型の子女の和合問題は人類のカイン・アベルの葛藤問題を克服する、また別の課題となるであろう。天一国は単一大家族社会を指向している。真の父母様の家庭がそうであるように、私たち祝福家庭も血縁的な直系の子女圏と入籍した霊の子女圏が愛と配慮でお互いに共存しなければならない。このような方式で世界は氏族圏を通して血統的に復帰される。霊の子女と直系の子女すべてが重要であり、霊の子女と直系の子女の調和のとれた和合を通して発展を図る事ができる。氏族共同体には相当多数の直系の子女と霊の子女が複合的に構成されるため、多数のカイン・アベル関係が存在するようになる。

言い換えれば、アベル型の子女を正しく教育し、カイン型の子女を服属させ、教育しながら、またアベル型の子女とカイン型の子女が和合統一して、一つの氏族共同体が真の父母様の御言を訓読、教育、実践、伝播する文化的現象を共同体内から具現し、世代を通して伝播することで整理する事が出来るであろう。

(4) 氏族共同体の環境造成

氏族メシアは氏族共同体と一緒に居住する環境を造成しなければならない。家族共同体と家族の拡大型である氏族共同体は構成員が頻繁に相互作業をしながら一緒に住まなければならないのが望ましい。すなわち、父母は子女を近い距離で出産、教育、保護する父母の役割をしなければならないのである。本研究者は氏族の始原となる場所であり、主居住地を氏族共同体が定着する場所として“故郷(hometown)”を定義する。真の父母様の還故郷摂理では失ったエデンの園に対する帰郷の意味、そして追い出された天の民の環境再開拓の意味があると見る。これを真の父母様は“還故郷”と表現された。私たちは摂理的に失郷民の位置にいたし、すでに真の父母様は祝福家庭が血統と伝統、御言と重生された霊の子女家庭を従えて、必ず還故郷しなければならないとおっしゃら

れた。真の父母から血統の伝授を受け、神氏族メシアの使命者として宣布された祝福家庭は必ず一定の活動地域、および任地を氏族メシア活動の足場として制定し、故郷にしなければならない。人間には誰でも帰巣本能がある。この帰巣本能は重生した祝福家庭が氏族メシアの使命を追って、各地で編成された氏族圏の子女達と共にカナンの地に入っていこうとする瞬間、すでに故郷の地を占領しているカイン圏氏族であるカナン７族に会うようになる。ここに氏族メシア摂理と共に統班撃破という概念が連結される。言い換えれば、氏族復帰の課業と地域復帰（統班撃破）の課業は連結されている。氏族が一緒に定着しようとすれば、氏族の近隣の人たちも救わなければならない[28)]。したがって、血統的に近い血族と一緒に、周辺に住んでいる人たちの親戚までも一緒に氏族圏に編入しなければ故郷の地（氏族村）を復帰する事が出来なくなる。すなわち、氏族が永遠に一緒に住もうとする環境を復帰することができない。ここに血統的に近いアベル型の子女と地域の最古参ですでに居座っているカイン型の子女の統合の問題が氏族メシアの課業として残っているのである。

（5）氏族牧会の確立

氏族牧会と氏族礼拝を通して神氏族メシアがしなければならない課題に対する議論が重要である。神氏族メシアは氏族共同体の代表者であり、真の父母として氏族構成員から信頼と尊敬を受けるようになる。氏族の代表父母の位置から氏族構成員を指導し、氏族構成員の個別的成長、そして家庭的成長に責任を持たなければならず、また氏族次元の共通の課業である共同体の維持と成長に対して責任を持たなければならないのである。また、定期的な宗教行事である訓読会や礼拝、集会を開催し、氏族構成員を養育し、信仰水準を維持しなければならない責任が氏族の代表者である氏族メシアにある。以上の段階を通して、使命を自覚した祝福家庭である神氏族メシアが氏族共同体の形成過程を概略的に構想してみた。次の【表 3-1】は議論の要約である。

【表 3-1】神氏族メシア共同体形成のための数字的段階

段階	段階名	遂行課題
1 段階	氏族共同体の形成	・ 直系の子女の養育 ・ 霊の子女の編成 ・ 基本的な信仰教育の実子
2 段階	氏族共同体の維持	・ 氏族内の祝福家庭３段階以上の継代編成
３段階	氏族共同体文化の定着	・ 氏族内の祝福家庭集団の和合および均衡 ・ 氏族固有の伝統遺産の確立
4 段階	氏族共同体の環境造成	・ 統班撃破活動を通した地域化 ・ 任地内の氏族センターの造成
5 段階	氏族牧会の確立	・ 氏族構成員の信仰成熟 ・ 氏族内の家族共同体の成長 ・ 氏族の維持と成長

Ⅳ．平和運動としての示唆点

4.1 平和運動としての示唆点

大部分の葛藤が思想、宗教、民族によって発生するという点に照らしてみると、宗教理念に根拠を置く氏族共同体の発展は意味があるものであると見る事ができる。現在の平和状態と平和の展望にどう寄与するのかを論じていこう。

現場でのモデルの活用に対する重要事項は次のようである。

まず、宗教理念を中心とした氏族共同体は一つの宗教の布教活動のためのアイディアではなく、全地球的に統合と調和を導き出すことができる新しい平和の普遍的価値として機能する事ができると見る。全地球的に一元化されていく事ができる世界化の波の中で、ひょっとすれば失いやすい人間のアイデンティティと関係性を家族と氏族の枠に縛り付けることで心情文化の基盤を地域的に土着化させることができる。すなわち、正しい世界化と地域化の均衡の土台となることができる。

二番目に、氏族共同体は祝福家庭の拡大型として家庭の構造と機能を数的に拡大したものである。霊の子女と直系の子女の構成、そして数理法則、そして地域的文化現象に影響を受け、多くの種類の氏族共同体が誕生することができる。氏族共同体の躍動性は社会的関係の躍動性に連結され、究極的には社会的、集団的創意性を生産する事が出来るものとして期待される。したがって、氏族構成員の数によって共同体の規模が違うのである[29)]。

三番目に、韓国の親族制度は家庭連合が追求する氏族共同体と似たものと予想される。儒教の家族中心の文化を通して氏族文化の原型を探索することができるため、儒教の教えと韓国社会の大家族の構造と形態に目を注がなければならないであろう。儒教文化的な特徴、親族世界において指導者（宗親会の長）がしなければならない課業が神氏族メシアの課業となるものと予測できる。氏族の規模に従った氏族文化の差別的特性を詳しく見る必要がある。

四番目に、氏族共同体は家庭連合の構成員である祝福家庭に限らない。多様な氏族共同体は家庭連合を超えて、一つの社会運動としての魅力をもつ。核家族化されていく現代の物質中心の資本主義社会で、神様を中心とした一つの大家族社会は超宗教的次元で意味がある。

4.2 研究要約

本小項は家庭連合の意欲的に推進している神氏族メシア運動に対する一つの探索研究である。本小項は特に、家庭連合の神氏族メシア運動が祝福家庭を拡大して、氏族共同体を形成して進んでいくことで、地域社会の心情文化の拠点となり、さらに一つの平和世界を指向する社会運動として価値があると見た。その実現法案として祝福家庭が直系の子女とともに霊の子女を本人の家族として受け入れ、家族の一員として編成することで、氏族共同体を形成することが核心的な過程であると論証し、必要な議論を進行した。

本論文を通して到達した結論は次のようである。

まず、一つの拡大家族の形態として氏族共同体に対する議論は有用であるという点を強調した。既存の家族概念の中でマードックとレヴィ＝ストロースなど拡大家族論を支持する学者達の議論の延長線に、氏族共同体のアイデンティティを議論することは氏族共同体の概念化のために有用な論議となるということを提示した。

二番目に、家庭連合が追求する氏族共同体が一つの宗教共同体として長所をもつ事が出来る点を提示した。氏族の長所が宗教価値と連合される時、肯定的な効果として現れる事が出来るということを議論した。

三番目に、氏族共同体形成運動が一つの社会運動として定着される時、より心情文化の基盤を拡大させる事が出来るという点を議論した。これは家庭を通した心情文化の継承より、氏族を通した心情文化の継承がより強い文化を形成する事が出来る点で有用であると見る。

4.3 研究限界および後続研究提案

本論文の研究限界は次の通りである。

まず、本研究に紹介された概念に研究者の主観的意見が多く介入された。平和運動と氏族共同体に対するより幅広い理論的説明が必要である。

二番目に、本研究は制限された研究機関によるものであり、より広い文化探索を実施できなかった。より多くの学者たちの同参と関心が要求されると言えるだろう。

三番目に、本論文には氏族共同体の存在目的を氏族共同体の社会的な影響力に注目した。しかし、この論点は極めて実用的な接近にすぎない。当為性を説明するのに理論的に不足している。したがって、氏族共同体の宗教的な氏族概念と氏族共同体に対する概念により深度ある学問的議論が必要である。氏族の概念は神学的にどのように説明されるのかによっては論難の種ともなるし、希望の話題となることもできる。

本論文で十分に扱う事が出来なかった内容がある。本論文を通して提起される“氏族共同体運動”に対する後続研究の方向は次の通りである。

まず、氏族共同体の形成に対する理論が必要である。私たちは神氏族メシアが氏族共同体を形成していく過程へ注目しなければならない。同一の課業もその順次的過程の中で多くの変化があるので、私たちはより多様な観点が必要である。本論文では統一神学的観点、組織論的観点を提示した。これを超えて学問の多様な観点を動員して、神氏族メシアの課業過程(process of tasks)の理解に助けとなる観点を動員する必要があると見る。

三番目に、氏族と宗教理念の均衡に対する研究が必要である。氏族共同体を特定の宗教や文化圏に局限せず、超宗教、超文化的な観点から均衡に対する議論、そして分配的役割に対するより精密な研究が必要で、これによって管理的介入が明らかに提示されなければならない。

四番目に、氏族は新しい概念であり、社会的単位としての家庭連合が提示する一つの社会運動として固有のブランドとならなければならない。したがって、研究を通して宗団次元から政策的に、体系的に扱われなければならない。氏族次元の政策の開発および支援はどんなに強調してもしすぎることはないものと見る。

参考文献

ケリーマッキントッシュ、『教会が違えば牧会が違う』、ソウル：권서인、2010
김두섭　他、“情報化による家族の未来と家族の情緒的機能変化に対する展望”情報通信政策研究院、2006
文鮮明先生御言編纂委員会、『文鮮明先生御言選集第 54 巻』ソウル：成和社、p.18
文鮮明先生御言編集委員会、『文鮮明先生御言選集第 173 巻』ソウル：成和社、p.202
文鮮明先生御言編纂委員会、『文鮮明先生御言選集第 213 巻』ソウル：成和社、p.254
世界平和統一家庭連合、『原理講論』ソウル：(株) 成和出版社、2006
世界平和統一家庭連合、天一国憲法解説：법원편　ソウル：(株) 成和出版社、2014
世界平和統一家庭連合世界本部、“神氏族メシア研究資料集”2015
윤덕우、“低出産社会での拡大家族の有用性に対する研究”　영남大　博士学位論文、2010
レヴィ＝ストロース, Claude. The elementary structures of kinship. Boston : Beacon Press. 1969.
マードック, G. P. Social Structure. New York : Macmillan. 1949.
マードック, G. P. The Universality of the Nuclear Family. In Bell, Norman and Ezra Vogel. A Modern Introduction to the Family. London : Routledge & Kegan Paul. 1960.

1) 本研究は世界平和統一家庭連合世界本部の研究支援と協力で遂行された。論文の研究内

容に対する責任は本研究者にある。

2) 清心神学大学院大学校天一国経営学教授（連絡先：携帯電話 82-010-2292-4717, Email：ydy123@cheongshim.ac.kr）

3) 本団体の、またはその理想郷に対する国家概念である“天宙平和統一国”の基本概念に対して、文鮮明総裁は“二つが一つになる世界”であると定義された。

4) 世界平和統一家庭連合世界本部、“神氏族メシア研究資料集”、(2015.3.6)

5) 世界平和統一家庭連合、天一国憲法解説：법원편 ソウル：(株) 成和出版社、2014.p.273

6) 윤덕우、低出産社会での拡大家族の有用性に対する研究、영남大　博士学位論文、2010

7) 김두섭他、情報化による家族の未来と家族の情緒的機能変化に対する展望、情報通信政策研究院、2006

8) 韓国社会の例を挙げれば、韓国社会は伝統的に大家族社会であったが、産業化と共に核家族が普遍化し、現在核家族を超えた極端的形態の“1 人家族”が拡大している趨勢がある。1 人家族は夫婦の結合さえも否定する概念として、社会に蔓延する個人主義を正当化する概念である。社会の個人主義化の趨勢によって血縁的関係による 2 世代の家族構成員の関係で定義される核家族のアイデンティティさえも崩れることは、社会の構成員が家庭の機能と有用性を非常に狭く限定したことの結果である。

9) レヴィ＝ストロース, The elementary structures of kinship, Boston：Beacon Press, 1969.

10) 家族の形態を分類する方法には学者たちによって見る視覚と基準によって非常に多様に分類される。家族形態は家族の家長や戸主一人、または夫婦を中心として家族構成員がこれらとどのような関係にあるのかを調査し、形態を分類することで核家族とそれ以外の家族に分類する方法、家族員の結合範囲に従って分類する方法、世代構成員数によって分類する方法がある。윤덕우、低出産社会での拡大家族の有用性に対する研究、p.14-15 参照

11) そして拡大家族と複婚家族を合わせて複合家族として区別し使用した。核家族はその父母と未婚の子女の 2 世代で構成され、拡大家族は色々な核家族と彼らの近親たちが一緒に住む家族形態を言う。マードックが最初に使用した拡大家族は、従来一般的に使用されてきた大家族と小家族という概念に比べて明確である。윤닥우、低出産社会での拡大家族の有用性に対する研究、p.14 参照

12) このような多次元的情緒性はすでに学校、地域社会、同好会組織など、多様な非営利団体などで観察されるが、血縁的関係を根幹とする社会集団および家族や宗親会などでは相対的に高いと言うことができる。

13) 社会の中での英雄や偉人など指導的位置にいる個人とその家族は社会的影響力が高いと言えるが、一般的に普通の個人と家族の社会的影響力は相対的に高くない。

14) 血統的な因縁（血縁）、地理的な因縁（地縁）、そして学びの因縁（学縁）が一般的である。特に、韓国人はこのような長年の因縁を重要視する慣習がある。

15) 家庭が氏族として拡大されることは自然な現象である。伝道活動を通さなくても多くの子女を出産し、2 世、３世と引き続くようになれば、自然に家族共同体は拡張して、氏族圏が形成される。すなわち、2 世教育だけでも自然に教会成長が可能である。しかし問題は、祝福の恵沢圏外にいる多くの人類を復帰しなければならない責任がメシアにあるという点である。真の父母様が世の中を救われるように、氏族メシアも小メシアとして世の中を救わなければならない。したがって、国家復帰のための世界的次元の救援使役に同参するために、祝福家庭として編成しなければならない摂理的氏族編成の基準を真の父母様が明確に提示されたという点は重要である。したがって、氏族メシアが代を引き継ぎ、直系の子女をどの程度の規模で維持するかという、またはどの程度霊の子女を氏族の構成員として編成するのかという家族計画は摂理的に重要である。

16) 真の父母様は還故郷摂理と氏族メシア摂理を分離されず、同時に語られた。氏族メシア

がすることがまさに還故郷をすることであり、反対に還故郷して氏族メシアがすることは氏族を探すことである。二つの課業がお互いに連結(linked)されている。

17) 真の父母様は、2 世達も伝道をして霊の子女を編成しなければならないと語られた。

18) 韓国の集性村と似ている。

19) 真の父母様の御言を分析すれば、氏族復帰と地域復帰（統班撃破）がお互いに排他的な課業ではなく、お互いに連結され、かみ合っている課業であるということを確認する事が出来るが、氏族メシアは二つの課業を同時に遂行することにおいて、アベル型子女とカイン型子女の二つの集団がお互いに調和を成し、共存することができるようにすることが重要な鍵になる。

20) 氏族単位(open unit)は家庭単位(family unit)に比べて、より開かれたシステム(open system)の特性を持つ。氏族は構成員の規模によって家族に比べ相対的に関係が緩い。したがって、家族集団は相対的に氏族集団に比べてより閉鎖的となる。氏族は緩い関係によって外部により開かれたシステムの特性を持つようになるのである。したがって、氏族を通して伝授された伝統文化は家族集団に比べて共同体の領域を超え、社会に流れやすく、また社会の文化現象が共同体の領域に浸透しやすい。

21) 霊の父母は家庭連合の構成員すなわち信徒として、祝福対象者を祝福式に導いた者を言い、霊の子女は自動的に霊の父母の子女となる。

22) 祝福家庭が少数の霊の子女を自身の家庭に霊の子女として編成するとすれば、氏族摂理であると言うことができない。氏族メシアの氏族はより大きな数字の子女圏を意味する。真の父母様は摂理路程において氏族メシアの完成基準を 1990 年代 160 家庭、2015 年 430 家庭など一つの家庭摂理であると言うには非常に大きな数字の子女圏を提示された。したがって、氏族摂理に対する概念であるということが適合である。

23) 実際に摂理路程上、数多い祝福行事を通して探し出された祝福家庭が、教会内に定着できない理由の一つは霊の父母が一定の数字以上の霊の子女を管理することができなかったためであるという側面がある。すなわち、祝福家庭が教会共同体の中で定着過程に霊の父母が介入するのが難しかったためである。真の父母様の御言によれば、一家庭が 20 家庭以上を教育、管理することは現実的には難しい側面があるとおっしゃられた。人類を救援するためには、または主権復帰をするためには祝福家庭がもっと多くの伝道活動に参与しなければならないが、一祝福家庭が一定の数字以上の新しい食口を管理することは現実的に容易ではない。実際に祝福まで成功するとしても、教会内で新しい食口が定着できない可能性が高い。新しい食口に対する教育と管理の問題に逢着するようになるのである。

24) 文鮮明先生御言編纂委員会、『文鮮明先生御言選集』54 巻、（ソウル：成和社）p.18

25) 文鮮明先生御言編纂委員会、『文鮮明先生御言選集』173 巻、（ソウル：成和社）p.202

26) 文鮮明先生御言編纂委員会、『文鮮明先生御言選集』213 巻、（ソウル：成和社）p.254

27) 霊の子女圏と直系の子女圏の比率を見れば、漸進的に直系の子女圏が拡大されている現象が、まさに地上天国の恒久的理想となるシグナルとなるであろう。

28) 堕落人類の存在を退けて、重生された祝福家庭だけが氏族圏を成して、その地域社会に唯一の主人として登場することはできない。真の父母様はアベルだけの供え物を受ける事はできないのである。

29) 共同体の規模によって、全ての管理的内容が差別的に適応されなければならない。ケリーマッキントッシュ、『教会が違えば牧会が違う』、（ソウル：권서인）2010